
悪意

青式部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪意

【Nコード】

N2409Q

【作者名】

青式部

【あらすじ】

恋愛戦争と権力闘争が主題です。

太宰は『人間失格』で葉蔵の恋の悲劇を、漱石は『こゝろ』で先生の裏切りを書いた。だが現代の恋愛模様は無責任で哀愁もない。利己と卑怯が時代の精神なのだろうか。

俺は告白しなければならぬだろう。実を言えば俺は嘘ばかりついていたのである。俺は三島由紀夫と同じ有閑階級の人間だ。だから三島の気持ち分からないでもない。俺にとって世界は演劇の舞台のようなものだし、仮面を被って人を騙すのは俺の病気なのだ。違うことと言えば俺は輪廻転生に関心がない。そして同種の人間とつるんで縄張りを張り、他人を不幸にするのが好きだった。

犠牲者がいれば俺達の生活は潤沢なものとなる。俺たちの潤沢さは犠牲者との均衡を保って存在している。悪は滅びる。悪は滅びるはずだ。しかし不思議なことに俺は滅びなかった。俺が告げるべき懺悔や支払うべき代償、それは優越や快樂という名の罪でしかない。

貧乏人や無粋な奴らや青臭い人間には牽制球を放っておけば良い。俺は他人を犠牲にすることなど厭わなかった。不思議と女はそんな俺を喜んだ。集団が魔力なのか犠牲者が魔力なのか区別がつかなくなったくらいだ。だがどうやら女というものは男が裏切り騙し合うのが好きないきものらしい。性善説と性悪説があるが俺は性悪説に一票を投じたい。女は残酷ないきものに相違ない。

草食男子という言葉が流行した頃も、俺は草食男子然とし、女に困ったことが無かった。それは俺が器用さを持ち合わせていたからだろう。俺は偽善者で仲間も偽善者だ。この世間という所では偽善という仮面を剥がされることは何故か無い。偽善者、仮面、嘘は飲

迎されている。

親から高級車を与えられていた俺が、趣味はドライブだと言えば会話は弾んだ。どんな女も車種を言えば眼の色を変えた。そんな俺に男たちも群がってきた。大学内でも俺たちは特別だ。学内の重要情報を共有し、複数かつ匿名でいじめを行い、優等生として押し通した。

そしてその延長線上には同じような道が用意されていた。俺は就職の誘いを受け、誰もが羨む企業への入社を決めた。充実した学生生活を過ごし、多様な経験をしてきたことが評価されたのだろう。先輩の引きこみもあり、多少の凹凸こそあれ、それなりの所へ進路を決めて次のステップを踏み出した。

俺たちの構成主体は悪人、富裕層、遊び人等で、卑怯さが唯一の基準だ。女はエゴイストで男は狡猾でなければやって行くのは難しい。そもそも誠実という仮面を被っているので簡単に人は騙される。だが俺たちは無関係者の恋をわざわざ妨害し、社会的弱者を犠牲にし、罠をはって邪魔者を排斥してきた。例えばあいつがやる筈がないという先入観や社会的常識、それを利用した罠に人は面白いように嵌るものだ。それによって俺たちが得たものは同じ輩との連帯感や力や利潤そして快感だ。

その影で車輪の下敷きとなる学生の存在も俺は知っている。だが俺には何の関係もない。俺たちは俺たちが良ければ良い。みんながそう思っていたことだろう。誰かを犠牲にすることも自分のためであればやむを得ない。そうしなければ勝ち組で居続けることはできないのだから。

ときどき青臭いことを言う輩がいるが、俺はそいつらを見ると虫

唾が走る。どうかして奴らを地獄の底へと叩き落としてやりたくなる。他人の不幸は蜜の味というのがその言葉を掛け値なしに正しいと俺は思う。この世に平等なんて存在しない。他者の不幸こそ俺の基盤となる。

だが俺は誠実に見せるのが得意だ。恨まれるようなことをしても、犠牲者は選んでやってきた。最低でも匿名性を維持し複数で行うことで、社会においての地位を保持してきた。完璧な悪というのがあれば俺たちのような輩こそ社会の実像だ。大人も外部者も進んで騙されにくる。俺たちを悪く言う奴は世間では妬んでいるだけだと思われる。そして妬んでいる奴を見ると俺は迷惑だと思う。あいつらは努力が足りないか、人間性が未熟なのだろう。

たしかに集団内の見栄、権力、恋愛のため、無関係者の足を引張り、頭を踏みつけ、時には友人や恋人を裏切り、欺いたことも少くない。それどころか積極的に他人や仲間を犠牲にし、俺たちは女を手にし、女を維持し、力を掴み、それを放さずに生活してきた。人の痛み、善悪、道徳で躊躇するような輩は、俺たちの集団には存在しない。偽善こそが素顔。それが悪だ。

ところで俺は道徳心というものが分からない。分かれようとも思わない。人の不幸は関係ない。むしろ積極的に人を不幸にして恋も力も金も手にしてきた。そうでない奴はもう俺たちとは別世界にいる。善人は遙か下の方で俺たちを仰ぎ見ている。悪は滅びる。だが俺たちは卑怯さや匿名性を持合わせている。悪を行うとき注意を払うことを俺は忘れない。無差別、複数、妨害、裏切、欺きその代償は優越や快楽だ。無関係者や仲間を犠牲にして結束力を強めてきた。こうした循環機能が俺たちと負け犬の善人を隔絶してきたのだろう。

実を言うと相手が青臭ければ尚更、思う壺だ。どちらに転んでも

俺たちは損しない。捨て駒か犠牲者となるだけだ。俺は自分のためなら、どんなに卑劣なこともやることにしている。躊躇する人間はここにはいられない。いつてみれば善や悪は完全に虚構であった。この世界は何のしがらみも無い自由な空間だ。金、異性、力、夢、あらゆるものが無法地帯に置かれている。そして勝負は最も卑怯な人間が勝つ。俺たちは卑怯で狡猾な悪人。

だが時は全てを洗い流す。過ぎ去った記憶は綺麗なもののだけが残り、残り滓は葬られるだろう。俺たちの記憶同様、世間の記憶に残るのは上澄みだけだ。騙され裏切られ欺かれ妨害され落ちていった人間の不条理は無だ。一定数存在する必然。

（後書き）

この小説は恋愛貴族、恋愛格差、権力闘争を主題としました。告白という形式を取りましたがあくまでフィクションです。主人公や学校や社会のモデルは実在しません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409q/>

悪意

2011年1月26日04時43分発行